

1 文(文章)で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されていません。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点(独立採点)すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d **解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容(語句)などがある場合は、その内容(語句)を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、**一箇所につき1点の減点要素**とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

※字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「:とはどういうことか?」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

※ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

D

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 答案の文章が最後まで完結していないもの。

d 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたものの。

e 字数指定のある設問で、制限字数の半分に満たない場合は「字数不足」と記し、全体×として、0点とします。この原則と異なる採点をする場合は、採点基準で指示します。

一 (評論) 採点基準 (合計 50 点)

問一 各1点 (計5点)

- 1 儀式
- 2 卓越
- 3 新奇
- 4 造詣
- 5 過程

※解答通り

A ○2点

芸術とは、私たちの日常生活とは関わることなく、

B ○3点

美を求める作り手の創意に基づいた個性の表現であり、

C ○2点

それは創り出された作品は自律性を持った、

D ○3点

見るためだけに存在するものであるということ。

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「芸術とは、私たちの日常生活とは関わる」とがなく」(2点)

※「芸術のための芸術」と対比的な位置づけにある「生活の中の工芸作品」についての指摘。

○「生活と結びついた工芸とは対照的な」も可。

○「生活とは切り離された」も可。

B 「美を求める作り手の創意に基づいた個性の表現であり」(3点)

※第3段落の「個人の創意」「画家(芸術家)の個性の表現」についての指摘。

○「芸術家個人の創意に基づいた表現で」も可。

○「芸術家の個性の表現で」も可。

C 「それは創り出された作品は自律性を持った」(2点)

※第4段落の「自律性」の指摘。

D 「見るためだけに存在するものである」と「と」(3点)

※傍線部「純粹性」(「そのためだけにある」ということ)を第4段落の表現を用いて説明。

△「見るためのものである」ということは、「くだけ」という限定の意味が不明瞭であるので▲1点減点で

△2点。

A ○1点

天才的な作り手の

B ○3点

強烈な個性が表現され、芸術のため芸術として創り出された作品が持つ美とは異なる、

C ○1点

名もない職人が、

D ○3点

私たちが日常の生活を営む中に生じる必要性から作り出した工芸品が持つ美のことで、

E ○3点

生活者を本当の意味で幸福にすることのできる美のこと。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「天才的な作り手の」(1点)

※「生活の中の工芸作品」と対比的な位置づけにある「芸術のための芸術」について、その作者の指摘。

B 「強烈な個性が表現され、芸術のため芸術として創り出された作品が持つ美とは異なる」(3点)

※「芸術のための芸術」を、第7段落の「個人の自覚に基づくもの」であることと合わせて説明

△「個性が発揮された美とは異なる」は、「芸術のための芸術」についての指摘が不足しているので▲2点
減点で△1点。

C 「名もない職人が」(1点)

※Aの観点に対応する作り手の説明。

D 「私たちが日常の生活を営む中に生じる必要性から作り出した工芸品が持つ美のこと」(3点)

※生活の必要性から生じた作品であることの説明。

△「生活の中にある美」は、生活の「必要性から生じたもの」であることの指摘が不足しているので▲2点
減点で△1点。

E 「生活者を本当の意味で幸福にすることのできる美のこと」(3点)

※第8段落の「人間の幸福」につながる美であることの指摘。

A ○2点

一般の人々の生活に必要なもので、

B ○2点

その役に立つことを考えて作り出される工芸品は、

C ○3点

単純かつ質素で、しかも堅牢でもあるが、

D ○3点

そこには使いやすさや単純さを求めた結果として生じる美が備わっているから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「一般の人々の生活に必要なもので」(2点)

※一般的な「生活」に関わるものであることの指摘。

○「生活に役立つもので」も可。A・Bを合わせた説明として扱い、4点。

B 「その役に立つ」ことを考えて作り出される工芸品は」(2点)

※第13段落から、「生活」に「役立つもの」であることの指摘。

○「生活に役立つもので」も可。A・Bを合わせた説明として扱い、4点。

C 「単純かつ質素で、しかも堅牢でもあるが」(3点)

※第13段落から、「単純」「質素」「堅牢」の指摘。

D 「そこには使いやすさや単純さを求めた結果として生じる美が備わっているから」(3点)

※傍線部「用の美」の「美」についての指摘。

×Cの観点を説明し、「くから」で終えたものは、「美」の説明をしていないので×0点。

A ○3点

無意味な形式として批判される「型」は、

B ○3点

無駄なものであると考えられるが、

C ○3点

それが柳宗悦の目指す茶道の核心に据えられていることは、

D ○2点

「見すると、同じ柳が説く、無駄をはぶいた簡素さを求める民芸の美のあり方に反するように思えるが、

E ○3点

「型」とは、茶道の長い修練を重ねていく中で、余分なものがすべてそぎ落とされて身についていくものだということを適切に表しているから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「無意味な形式として批判される」ことがある「型」は「3点」

※第17段落、傍線部の直後の「『型』は強制を意味する」「『型』は無意味である」の指摘。

B 「無駄なものであると考えられるが」(3点)

※Aの観点から、それが「無駄」であることを説明。

C 「それが柳宗悦の目指す茶道の核心に据えられている」とは「3点」

※A・Bの観点のことであるにもかかわらず、「型」が「柳の茶道の核心にあること」の指摘。

D 「見すると、同じ柳が説く、無駄をはぶいた簡素さを求める民芸の美のあり方に反するように思えるが」(2点)

※問いの条件「民芸の美」の内容とその関係性を指摘。

E 「型」とは、茶道の長い修練を重ねていく中で、余分なものがすべてそぎ落とされて身についていくものだという「ことを適切に表しているから」(3点)

※茶道の「型」が「無駄」のないものであることの説明。

二 (対談) 採点基準

問一 8点

A 3点

B 3点

(模範解答例) 小説家が、作品を執筆する時、自分の生きる時代・社会の前提から逸脱しないように現実を捉えようとする意識。
C 2点

★ (模範解答例)のように小説家(作家)の一般的な意識として説明してほしいが、近・現代の小説家の意識として説明されていても許容する。

A 作品を執筆するにあたっての小説家(作家)の意識であることが答案に明示されていれば3点与える。「小説を書く時」「小説家の」といった言い方があれば可とする。

B 現実把握に際しての小説家の前提、あるいは、小説家を誘導、束縛するものの提示。本文の「世の中の前提」という表現をそのまま使っている場合、また「近代・現代の人間の考え方(通念)」といった言い方になっても許容して3点与えてよい。

C 本文の「現実の捉え方」に対応する。答案をよく吟味して、ほぼ同内容の説明があれば2点与えてよい。

A① 3点

A② 3点

B 2点

(模範解答例) 社会的に共有されている論理に従うのではなく、あえてそこから逸脱する方向で小説を構想していくということ。

★ もとの傍線部は「AよりもB」という形になっているので、答案にも対立する二項を示さなければならぬ。そのことを念頭に置いて採点にあたる。

A ①と②が対比になっている。本文には「世の中の前提というのを取っ払って」とあり、言うまでもなくこれが傍線部の「こわしていく」に対応する。傍線部の「こしらえていく」とぴったり対応する表現は本文にはない。但し「世の中へ迎え入れられた時、掟というものがありませんね。つまりみんなと協調し、共通の言葉を使っていかなければならない」という記述が参考になる。すなわち「こしらえていく」とは「世の中」の「掟」に従って作品を執筆することだと判断できる。そして、その後の本文内容からすると、それが「自然主義リアリズム」に則った執筆態度であると判断できる。とすれば「こわしていく」とは「自然主義リアリズム」から脱却して「夢を夢の論理で説明する」ということである。こうした読解に従った答案になっているか否かをしっかりと吟味して採点にあたる。

整理すると「こしらえていく」∥「世の中の掟」(∥社会的に共有されている論理に従う・自然主義リアリズムに則って既成の論理に従う)、「こわしていく」(∥あえてそこから逸脱する・作者自身の夢の論理に従う)ということである。ほぼ同内容と判断できれば、A全体として6点与えてよい。

ともかくA①に関しては「世の中の前提(というの)」を取っ払って「が答案にそのまま示されていれればまず3点 与えてよい。A②に関しては、A①から「逸脱」あるいは「脱却」することが示されていれれば3点与えてよい。その場合「夢の論理」に従う(則る)といった内容が示されている答案も許容する。説明が曖昧であると判断されるなら1点だけ与える。

B 「構想していく」は「創作する」「執筆する」「書く」「(を・について)考える」などでもよい。ともかく傍線部が小説家の創作態度について言われていることが示されていれればよい。

A 3点

B 3点

C 2点

(模範解答例) 個々人の内部に生成する夢想を、現実とは異質なそれ自体の論理に忠実な形で 作品の中に

表現するということ。

A 傍線部「幻想」の説明。本文に「作者と軸車の夢想」とある。すなわち「幻想」は作者だけのものでも、読者だけのものでもない。また「人間の内的〈自然〉」という記述もこの「幻想」に関わっている。つまり、「幻想」とは現実とは異次元のところ人間一般の内部に生成する夢想である。そこから「個々人の内部に生成する夢想」という説明が引き出されている。目安としては「個々人(人間)の内部(内的)」に2点、「夢想」に1点与える。「生成する」はなくてもよい。

B 傍線部の「リアルに」に対応している。本文の「小説が作り出している一種の論理」「夢の論理」「夢を夢の論理で説明する」から引き出された説明。この「リアルに」が「自然主義リアリズム」の「リアル」とは異質であるということを提示している。同等の説明ができている答案は少ないと予想される。同じようなことを説明しようとしていると受けとられる答案には1点与える。

C 傍線部の「描く」を的確に言い換えたもの。ほぼ同等と判断できれば2点与えてよい。

問四 12点

(模範解答例) 既成の秩序が崩壊した A 3点
戦争 B 1点
という空虚で荒んだ時代状況に直面して、自分の生き C 3点
E 2点

る世界が意味を喪失し、けれどそうした世界と向き合わざるをえなかったということ。

A 本文の「人間のつくった約束ごと」というものがこわれてしまった」に対応。そのまま答案に引いても許容する。

B 傍線部の背景に「戦争」という時代状況のあることが明示されていればよい。答案中のどこにあってもよい。

C 本文の「何もない時代」「非常に荒んだ時代」に対応。「何もない」(≡空虚)に1点、「荒んだ」に2点という目安で採点する。

D A・Cが小川国夫にもたらした喪失感の説明。本文の「現実の解体感覚」に対応する説明になっている。同等の説明ができている答案は少ないと予想される。「現実の解体感覚」をそのまま答案に使っている場合、また、近い意味の説明ができている答案と見なせる場合には1点与える。

E 傍線部は“現実を明確に捉えきれないことが現実である”という逆説的表現である。そのニュアンスが答案の説明に反映されているか否かを吟味する。これも明快に説明できている答案は少ないと予想される。逆接のニュアンスが何とか答案に反映できていると判断できれば1点を与える。

A 2点

B 4点

(模範解答例) 戦争中の勤労働員で知識人ではない素朴な庶民と共に労働に従事した経験を通して、そうした人々に対する引け目と敬愛の心情が小川国夫の内に生じ、それ以来論理的整合性よりもそのような人々の視点に立った現実認識が小川国夫自身のものになっているということ。

C 3点

D 2点

E 3点

A 小川国夫の、戦争中の勤労働員体験に言及できていれば2点与える。これを外している答案はまずないと予想される。

B 本文の「小説の対象になっている人が、インテリでもなんでもない」「素朴な意味の労働者、つまりお百姓とか、馬力引きとか、漁船員」「労働者と触れ合う機会が非常に多かった」をまとめたもの。「知識人(インテリ)ではない」に2点、「素朴な庶民(労働者)」に2点与えるのが目安。「労働に従事した」という言い方は、「触れ合う」「共に過ごす」等でもよいし、なくても可。

C 本文の「(労働者に対する)先天的な好みみたいなもの」「労働者に対するコンプレックス」から引き出された説明。「引け目」は「コンプレックス」でよいし、ほぼ同等の表現も許容する。これに2点。「敬愛の心情は」は「親近感」「親しみ」また「共感」などでもよく、これに1点与える。

D 問題文前半の「自然主義リアリズム」批判、すなわち既成の論理からの脱却、「夢を夢の論理で説明する」ことへの志向と、この文脈での「インテリ」批判から引き出される説明。この通りの説明を含む答案はあまりないと予想される。それらしい方向性で説明していると思われる答案には1点与える。

E インテリではない素朴な労働者の視点に寄り添って現実を見ようとする小川国夫の姿勢が説明されていれば、どのような言い方であっても3点与えてよい。

◆各設問共通

▲内容説明の設問では、末尾の句点がないものは▲1点減点。ただし、現代語訳の設問では、句読点は不問。

問一 10点

※傍線部(1)を、ことばを補いつつ現代語訳する設問

(模範解答)

A ○2点

(必須。以下同)

B ○2点

額田王は、天智天皇のお側にいらっしゃったのだが、

長歌を詠んで

C ○3点

「春の桜と秋の紅葉のどちらの美が勝るか」という御下問の

D ○3点

答えを「説明」になる。

(10点)

◆各加点要素の加点の条件【A・B・C・Dに関して部分採点】※ことばを補いつつ現代語訳する問題

▲各要素において、主体が違っていたら、▲2点減点。ただし、減点は0点まで。

A 「額田王は、天智天皇のお側にいらっしゃったのだが、」(2点)

※「額田王御かたへにおはしけるが、」の訳

×「おはしける」の訳、「いらっしゃった」ができていなければAは×。0点。

△「いらっしゃった」があれば、△1点。

○「天智天皇のお側に」「天智天皇と鎌足のお側に」等の記述が△に加われば○2点。

B 「長歌を詠んで」(2点)

※「歌を詠みて」の訳

△「歌を詠んで」「和歌を詠んで」は△1点。

○「長歌を詠んで」と、和歌が長歌であることを明示していたら○2点。

C 『春の桜と秋の紅葉のどちらの美が勝るか』という御下問の「(3点)

※ことばを補う部分(何について額田王が説明するかという内容)

× 「春(山)の桜と秋(山)の紅葉はどちらが勝るか」という記述がなければCは×。0点。

△ 「春(山)の桜と秋(山)の紅葉はどちらが勝るか」という記述があれば△2点。

× 「春の桜」と明示せず、そのまま「春の花」は×。

○ 「(天智天皇の)御下問／お尋ね／ご質問」等の記述が△に加われば○3点。

D 「答えを」ご説明になる。「(3点)

※ 「ことわり給ふ」の訳

× 「ことわる」の訳、「答えを説明する」「優劣を判断する」という記述がなければDは×。0点。

△ 「答えを説明する」「優劣を判断する」という記述があれば△2点。

○ 「給ふ」の訳、「…になる」「…なさる」等尊敬語の記述が△に加われば○3点。

問二 10点

※傍線部(2)を、ことばを補いつつ現代語訳する設問

(模範解答)

A 〇2点

対岸の峰の**紅葉**は、

B 〇2点

顔を白粉や紅で**化粧**し、

C 〇2点

身には、黄色や紫色の色とりどりの**衣装**で着飾って、

D 〇4点

一瞬の華やぎを見せている**人間**のようなものだよ。(10点)

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・C・Dの各要素に関して部分採点】

A 「対岸の峰の紅葉は、」(2点)

※ことばを補う部分(主体の明示)

×主体である「対岸の峰の紅葉」という記述がなければ本来、×0点だが、

△「紅葉」であることが書かれていれば、△1点とする。

○「紅葉」が「対岸の峰にあることが△に加わっていれば〇2点。

※「対岸の峰」は本文「向峯」の訳だが、訳さず、そのまま「向峯の(群)紅葉」も可とする。

B 「顔を白粉や紅で化粧し、」(2点)

※「面に白き紅きをつくり、」の訳

×「化粧をする」という記述がなければBは×0点

△「化粧をする」という記述があれば、△1点。

※「白き」↓「白粉(おしろい)」、「紅き」↓「紅」は、なくても、可(もちろんあって構わない)。

Bは「化粧をしている」ということがわかればよい。

○「顔を化粧し」「顔に化粧し」というように、「面」の訳になる「顔」の記述が△に加われば〇2点。

C 「身には、黄色や紫色の色とりどりの衣装で着飾って、」 (2点)

※ 「身には黄なる紫なるを飾りて、」の訳

× 「色とりどりの衣装で着飾って」「はなやかな衣装で着飾って」という内容の記述がなければCは×0点。

△ 「色とりどりの衣装で着飾って」「はなやかな衣装で着飾って」という内容の記述があれば△1点。

※ 「黄色」や「紫」という具体的な色の描写はなくても構わない。「色とりどり衣装」「はなやかな衣装」のような表現でよい。もちろん、「黄色」「紫」という表現でも可。

○ 「身には」「身を」というような記述が△に加われば○2点。

D 「一瞬の華やぎを見せている人間のようなものだよ。」 (4点)

※ 「ひと時のさかりを見すがごとし。」の訳

× 「人間のようなものだ」「人と同じだ」というような、対岸の峰の紅葉を〈人間〉にたとえていることがわかる記述がなければDは×。0点。

△ 「人間のようなものだ」「人と同じだ」というような記述があれば△3点。

○ 「ひと時のさかりを見する」の訳である、「一瞬の華やぎを見せる」「ひと時の輝きを見せる」「ほんのいつとぎの盛りの時を見せる」のような表現が△に加われば○4点。

問三 10点

※白居易は「槿花」と「松」を対比して、それぞれを何の象徴と捉えているかを、わかりやすく説明する設問

(模範解答)

A〇5点

朝に花開いて夕にはしほむ槿花を 儂い栄華の象徴と捉えている のに対して、

B〇5点

千年の寿命を持つ松を現世に恋々とし死を恐れる執着の象徴と捉えている。

◆各加点要素の加点の条件

【A・Bの各要素に関して部分採点。ポイントと関係の無いことが書かれていてもその部分は不問(減点しない)とする。】

A 「朝に花開いて夕にはしほむ槿花を 儂い栄華の象徴と捉えている」 (5点)

※ 「槿花」は何の象徴と捉えているかの説明

× 「槿花を [] の象徴と捉えている」という内容の記述がなければ×。Aに関して0点

※ [] には次のような内容が入る。

「儂い栄華」「一瞬の栄華」「たったひと時の華やき」「潔さ」「思い切りよき」

「清廉さ」「潔白なもの」「望ましいもの」「好ましいもの」「前向きな姿勢」など

△ 「槿花を [] の象徴と捉えている」という内容の記述があれば△4点。

※ [] には前記の内容が入る。

○ 「朝に花開いて夕にはしほむ」「一日しか咲かない」という内容の記述が△に加われば〇5点。

※ 漢文の「一日自ら栄を為す」、注の「朝開いて、夕にしほむ」の表現

B 「千年の寿命を持つ松を現世に恋々とし死を恐れる執着の象徴と捉えている」 (5点)

※ 「松」は何の象徴と捉えているかの説明

× 「松を [] の象徴と捉えている」という記述がなければ×。Bに関して0点。

※ [] には次のような内容が入る。

「執着」「未練」「未練がましき」「潔くないもの」「恥ずかしいこと」「嫌悪すべきもの」

「好ましくないもの」「後ろ向きの姿勢」など

△ 「松を [] の象徴と捉えている」という内容の記述があれば△3点。

※ [] には前記の内容が入る。

⊕ 「松」の説明として、「千年の寿命を持つ」という内容が△に加われば⊕1点。

⊕ 「現世に恋々とし死を恐れる」「現世にしがみつき死を憂う」「生を思い死を忌避する」という内容が△に

加われば⊕1点。

問四 10点

※傍線部(4)について、どのような理由で、誰が誰に対して、「この子をばかへと告るべき」言ったのかを説明する。

(模範解答)

A ○ 3点

千年の長寿を誇ると詩歌で詠まれる松でも、雪や嵐によって折れたり倒れたりしている場面を見てきたが、

B ○ 4点

柏は雪や霜にも負けない堅固なもので、それにあやかって娘の名は柏と名づけたいと、

C ○ 3点

かへの母がその夫に言った。

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・Cの各要素に関して部分採点】

A 「千年の長寿を誇ると詩歌で詠まれる松でも、雪や嵐によって折れたり倒れたりしている場面を見てきたが、」 (3点)

※名前の候補の一つである「松」のダメな理由

× 「松でも、雪や嵐によって折れたり倒れたりする」という記述がなければAに関して0点

△ 「松でも、雪や嵐によって折れたり倒れたりする」という内容があれば△2点。

○ 「千年の長寿(を誇ると詩歌で詠まれる)松」という内容が△に加われば○3点。

B 「柏は雪や霜にも負けない堅固なもので、それにあやかって娘の名は柏と名づけたい」 (4点)

※ 「柏」の「松」より優れている理由と、それゆえ娘の名を「柏(かへ)」にしたいという考え

× 「柏にあやかって娘の名は柏と名づけたい」という内容の記述がなければBに関して0点

△ 「柏にあやかって娘の名は柏と名づけたい」という内容の記述があれば、△3点。

○ 「柏は雪や霜にも負けない堅固なもので」という△の理由が、△に加われば○4点。

C 「かへの母がその夫に言った。」 (3点)

※ 「誰が誰に対して言った」のかの説明

× 「かへの母(媼)がその夫(かへ・七郎の父)に言った」という内容の記述がなければCに関して0点

○ 「かへの母(媼)がその夫(かへ・七郎の父)に言った」という記述があれば、○3点。

× 「かへの父に言った」だけでは「誰が」が抜けているのでC×0点。

問五 10点

※傍線部(5)について、「真人の心」を「かへの母」はどのようなものと考えているか説明する

(模範解答)

A○3点

桜花や紅葉のような「一時の儂く浮ついた恋心などではなく、

B○3点

雪や霜のような苦難に遭遇しても変ることのない、

C○4点

誠実な男と女の愛情。

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・Cの各要素に関して部分採点】

※問題文では、「かへの母」は、

A 「桜」「紅葉」↓うつろいやすく、まこと(真)の心ではない

B 「松」「柏」↓雪の中でも色をかえない(うつろいやすくない)。

特に「柏」は、雪・嵐という困難に「松」より強い(色を変えない・折れない)⇒変らない

C 「雪・霜にも変わらない」ということこそ「真人」の心である
と、考えている。

この設問は、思い合う恋仲になっている、若い「かへ」と「宇須美」教え諭している場面であることを踏まえ、「真人の心」とは、どんな愛情かを答える設問である。

A 「桜花や紅葉のような一時の儂く浮ついた恋心などではなく」(3点)

※「真人の心」と逆の心の説明

×「『一時の／うわついた(恋)心・気持ち』などではない」という内容の表現がなければAに関して×。0点。

△「『一時の／うわついた(恋)心・気持ち』などではない」というような表現があれば△2点。

○「桜花や紅葉のような」というような本文でたとえられている表現が△に加われば○3点。

×「桜花や紅葉のような気持ちではなく、」では、具体的にどんな気持ちか不明なので×。0点。

B 「雪や霜のような苦難に遭遇しても変ることのない」(3点)

※「真人の心」の説明

×「苦難にも変らない」という内容の表現が無ければBに関して×。0点。

△「苦難にも変らない」という内容の表現があれば△2点。

○「雪や霜のような」というような、本文でたとえられている表現が△に加われば○3点。

C 「誠実な男と女の愛情。」 (4点)

※この場面の男女の場合の「真人の心」の説明

× 「誠実な(人の)愛情」という内容の表現がなければCに関して×。0点。

△ 「誠実な(人の)愛情」という内容の表現があれば、△3点。

△ 「真剣に相手のことを思う気持ち」のような表現でも△3点。

○ 「男女の」というような恋愛に関する心であることがはっきり判る表現が△に加われば○4点。